ヒナゲシの華

水無月奎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒナゲシの華

【Ｎコード】
Ｎ５１８９Ｚ

【作者名】
水無月奎

【あらすじ】
似た名前でありながら、厚遇されるヒナコと冷遇される主人公ヒナゲシ。同い年の従姉妹でありながら、周囲からの愛され度は主役とモブキャラ並の格差があった。
だが、異なる世界に飛んだ時。ヒナゲシはヒナコの影から躍り出る。

【話の傾向は、女平凡主人公が異世界トリップで逆転人生な逆ハーレム、シリアスダークになりきれないコメディ文体で乙女ゲー指向のご都合主義】

一話自体は短め、読み易いががっつり読み込む方には物足りない恐れあり。
恋愛面はＮＬＧＬＢＬがギャグシリアス混在で絡んでくる予定。注意喚起しますので、ご安心を。

似て非なるヒナ（前書き）

さてさて、物語の始まり始まり。

似て非なるヒナ

悲劇は、外から見ると喜劇に見えることがある。
対岸の火事であれば、何事もなく平和に滞りなく進むストーリーより、キャストが四苦八苦していることこそが面白い。
その苦悩する様が、涙する顔が、激昂するのが愉しいのだと。
他人とは得てしてそんなものなのだ。

などと悟りきった冒頭を語る私、名をヒナゲシという。漢字は雛罌粟なのだが、素直にこれが書けるだろうか。いや、書けまい。
というわけで、だーれも漢字を思い浮かべて私の名を呼ばないため、ヒナゲシなのだ。

そんなヒナゲシさんが、何人生悟りきっちゃった枯れた台詞呟いてんの、ってな話だが、今現在悲劇真っ只中だからである。他人には面白くて仕方ない類いの。

ヒナゲシは農耕して生計を立てているちっちゃな村の小娘なのだが、まるっきり同い年の従姉妹がいる。名をヒナコ。
この村で年齢がぴったり同じなのは二人だけ。2〜3離れた上と下の娘さんもいるが、十三なのは二人だけ。
親も姉妹とくるから、何かと比較されて生きている。
その比較こそが悲劇。他人から見れば喜劇。ちくしょう、運命を呪いたい。

ヒナコとヒナゲシ、という響きは似ているのだが、顔面とスタイルと漢字まで『似て非なるもの』、という言葉がピタリと当てはまる。
上に見られる側はいい。〜より可愛いね、〜より似合うね、〜より好きだなぁって褒められフィーバーだ。

が、下に見られる方からしてみたら。〜より可愛くない、〜と同じように出来ないの？、〜だったら良かったのに、と。まるで存在するのが悪かのように言われまくる人生をひっ被らされるのだ。詰んでる。人生詰んでるよね。この先の人生全て見えた気分だ。

これが母の語る物語ならば、こんな器量悪しの娘にも一途に想ってくれる男というものが存在するわけだが。

人生、そんなに都合良くはいかない。現実はいつだってシビアだ。初恋以降全ての恋心を踏みにじられ続けた私は、既に悟りきっている。まともな恋愛はもう諦めよう、と。

きっといつかあぶれた男性と見合い婚だ。それも嫌がられるなら、一生独り。あっ、泣いてないから。これ、ただの汗だから。

大人たちの心ない言葉はもうグッサグサとヒナゲシの心を突き刺している。その上で成り立った性格だ。もう清い心のあの頃には戻れない。人生、諦めが肝心である。

どんな台詞にもめげない鉄の心。傷ついた表情など、周りを喜ばせるだけ。そういうわけで、今のヒナゲシは完成している。親も遠い目をする、時々。

「ヒナちゃん！」

いかにも女の子らしい、甲高い声が響く。村を見下ろせる位置で突っ立っていた私は、顔を上げた。

「ヒナコ」

無垢な笑顔全開で走り寄ってきたのは、話題のヒナコさんだった。遠目から見ても可愛い。軽く死にたくなった。

「もう、ヒナちゃんったら！すぐに居なくなるの良くないよ！」
いや、お前こそ何故にすぐ真横に並びたがるのか。おかげさんで比較しやすく、ますます私は悪し様に言われるのである。
そんな事よりも。
ヒナコの背後に目を移し、うんざりとした。また増えている。
「後ろの男ども、また増えてんじゃん。何で連れてくるかな…」
十三ではあるが、十分女の子らしい可愛さがあるヒナコは、村中の男をもれなく骨抜きにした。その射程範囲は十代に留まらず、二十代三十代にも及ぶ。ロリコン野郎が多過ぎて死にたくなる。
逆ハーレムというものらしい。縁のない言葉だったが、ヒナコが身近にいることで、嫌でも野郎どもの醜い争いを間近で見続けるはめになった。
「それにヒナって呼ぶのやめて。それ、あんたのことだから。むしろ村中の共通認識だから」
それをあえて私に使うのだから、嫌がらせなのかと言いたくなる。
あっちのヒナちゃんは可愛いけど、こっちのヒナちゃんは、ねぇ…？なんて大人たちに言われてみやがれ。確実に何かが減るぞ。
「いいじゃない、ヒナちゃんと私しか、ヒナっていないんだよ」
うん、貴様が考えなしなのはわかった。ありがとう、君の無邪気でより一層傷つけられてます私。
背後に並ぶロリコンどものうっとり顔も吐き気に繋がる。私の体調不良は貴様らのせいだ。死ねよほんと。

「ねぇヒナちゃん、今度の収穫祭で歌と踊りを披露するの」
「ぜってぇー嫌だ」
「まだ言い切ってないのに」

何が言いたいのかは瞬時に把握した。
この幼馴染は、本気で理解してないのかと突き詰めたくなるほど、私を同じ舞台に立たそうとする。それがどんな悲劇を引き起こすか知らないで。
歌と踊り？こいつと一緒にやってみやがれ。ますます格差社会が生まれるじゃないの。主に私とヒナコの間に。
何でお前いんの？と怪訝な視線を集める晴れの舞台での羞恥プレイは一度で十分だ。そこに思い至らなかった過去の自分も抹殺してしまいたい。

ヒナコとヒナゲシさん。二人一緒に赴けば、お呼びでないと言いたげな怪訝な顔をされる辛さがご理解いただけるだろうか。
何でここに居るの？何で？
これほど人を傷つける視線があるだろうか。奴らは覚えてなかろうが、私は過去の一つ一つ覚えている。簡単に許せるわけがない。とどのつまりは孤立してるってことなんだけど。死にたいです。

「ヒナコが一人で歌って踊ればいい。どうせみんなが見たいのはヒナコ一人なんだから」

ざあ、と気持ちの良い風が吹き、目を細める。ここで居眠りしたらさぞかし気持ちが良いだろうが、そろそろ夕飯の支度がある。

「じゃーね」

求められるヒナコと求められないヒナゲシ。

求められない存在は、どこへ行けば良いのでしょうねぇ？？

ロリコンと両ヒナ（前書き）

トラウマは一つに非ズ。

ロリコンと両ヒナ

「ロリコンが多くて死にたくなる」

初めてこの言葉を口にしたのはいつの頃だったか。
私自身のことではない。何故なら私の横には大抵ヒナコという光り輝く可愛子ちゃんがいて、存在そのものを霞ませられてきたからだ。
うん、泣いてないったら。

自我が芽生える前から、衆目は私でなく私の横に何故かいるヒナコに注目していた。自覚した後は絶望という名の暗闇へおむすびころりんだったが、性別オスの眼差しは総毛立つほど気色が悪かった。

ーーなんでアンタは平気なんだ。

常に情欲にまみれて見つめられているはずのヒナコが反応せず、向けられてはいない眼差しに私がびびっている。まるで自意識過剰で男を見ているようで、私のテンションだだ下がりです。

私の存在に気づかず、男どもが話していることがあった。

「あああー…ヒナコたんてば体そのものが甘い饅頭みてぇええ。萌ゆる」
「すっべすべの白い背中や太ももがな！汚れのないおれの天使たん…いやもうおれの嫁！！」
「断固阻止。ヒナコたんはもれの嫁。清いムスメでありすべてを包み込む母であり淫らなこいびちょ」

ぞわわわわわ。

頭が太もも辺りにきてしまう大の大人たちが、ハァハァと息も荒くマシンガントークを繰り広げていた。
気づけよ。てめぇらの足もとにいるいたいけな子供によぉおおおぉう！

貧血状態に陥った私は、吐いた。大きな栗の木の下で。

村に住む大人たちが、一事が万事、こんな調子だったもので、うっかり好意を寄せた人物の本性を知るたび吐いた。
ダメだ。何かもうこの村超ダメだ。
まともな大人がいない。つーか妻帯者もこんな調子。まともな発言してる野郎も裏ではハァハァ逝ってた。

怖い。怖い怖い怖い。普通な大人って実はいないんじゃねぇの？
この世の人間すべて、ヒナコを認め求める人間しかいなくて、ヒナゲシを求めてくれる人はいないんじゃない？
げろげろと胃の内容物ぜんぶ吐き出した後に、残ったのは厳然とした事実。私にはありがたくない現実。

まだ子供と言って相違ないヒナコ。この先成長すればどんなことになるんだろうか。そしてその時も私は彼女の横に並んでいるのだろうか。同じ名前なのにね、と言われながら。何の罰ゲーム？

ヒナちゃん。ヒナちゃん。

最近では幻聴に怯えるようになった。
近くにいない筈の声が聞こえるんですが、これはあれでしょうか、心の風邪とか何とかいうアレ？戦士とも勇者とも呼ばわれる企業戦士たちが人間関係に悩みながらレベルアップして得る職業病？あれ、私思ったより追い詰められてる？？まだ十三なんだけど。

最近では逆ハーレムも大規模になってきた。つまりいつでもハフハフしてるオスどもを引き連れて参上する。私の胃がねじ切れる日も近い。

「ロリコンが多くて死にたくなる」

ぽつりと零した本音は切実だ。

頼む、少女ボディに「ッアー！」しない大人がいる世界に私を連れて行って。

リアルはきついよ　ｂｙヒナゲシ（前書き）

二人並んでても空気。エア存在。

リアルはきついよ　ｂｙヒナゲシ

春の妖精さんともてはやされている。
夏になれば大空を舞う小鳥さん、秋になるとたわわに実る木の実、
冬になれば誰にも心を溶かせない冬の女王の寵児と呼ばれる。一年
通して人外かよ。

もち、私のことではない。
隣にいるヒナコちゃんことである。
私自身は怒涛のごとく浴びせかけられる褒め言葉の流れ弾を受け、
魂が口から飛び出ている。

ー無理。自分が褒められるならまだしも、私なんか全く見えてな
い人たちの言葉は凶器だ。

しかも妖精とか天使とか。人間やめさせてどうするつもりだ。そし
てこんな言葉の暴力に何故にお前はご満悦なんだ。

懲りずに人外の隣に立つお前はバカかと思われた皆さま。１５０ｃ
ｍちょいしかない私たちを取り囲むこの壁が見えてますか？私の頭
の上に胸部がありますよね？そんな彼らが円陣を組んでますよね？
ね？

もちろん注目は隣のヒナコちゃんだ。収穫祭のためにと彼女の母が
精魂込めて縫い上げた一張羅を着て、貢ぐことに余念のない男たち
の怨念のこもったアクセサリーを散りばめた彼女しか見ていない。
それ以外に見るものなんぞない。ここには。アタシトカナー！

だが。私は彼女と従姉妹なのだよ。同い年のオンナノコなのだよ。

片一方だけが着飾ってるわけがないんだよね。親が姉妹ですしね。たとえ片一方の母親があんまり裁縫得意じゃなくて、娘を飾り付けるプラスアルファなアクセサリーを忘れててもね。同じ意味で着飾ってるんだから、並べられる。当然のように。

「ハァハァ。萌ゆる。ちょー萌ゆる。何あのスカート丈。何この襟ぐり。ちょ、おま。髪をかき上げるたび薫るフローラル。買う。絶対同じシャンプー買う。そんで同棲ごっこしちゃう。むほっ！」

初恋のお兄ちゃんが何か言ってる。

うん、意味なんか考えちゃイケない。今にも逝きそうな男がそこここに居るからな。ここで倒れてこいつらに触られるなんて願い下げだ！

顔面蒼白で今にもリバースしそうに汗かいてる私なぞ、誰一人として気づいちゃいない。か、悲しくなんてないんだからっ！

「ヒナちゃん、みんな喜んでくれて良かったね！今年も二人で歌おうね！」

『え……』

聴こえない筈の声が空気を伝って私の耳に飛び込んできた。

え、なに、お前も歌うの？一緒に？天使の歌声に雑音混ぜてどうすんだよ。

という、何とも痛い本音が。ＫＹヒナコ、デスノート決定。

「ヒナコ、みんなアンタの歌声が聴きたいみたいだよ。一曲歌ってやったら？」

そして死ね。あっ、違った、ここから出せ。

「ええー…ヒナちゃんの歌声とっても可愛いのに」

むくれたヒナコは妖精だろうか天使だろうか？もういっそ女王様でいいんじゃね？誰もが君に傅く。

「私は老害、アッイイマチガエタ、村長んとこ行って来るから。ヒナコは歌ってて」

永遠に。そして私に二度と話しかけんな。

速やかにその場から姿を消すという悲しいスキルだけは得ていたので、いつもより華やかになったヒナコに群がる男の群れから抜け出せた。

振り返る。うん、誰も追って来てない。当然なんだけど、悲しいね！空気ダネー！

収穫祭用の一張羅。が、見てもらえなければ無用の長物。虚しいけれど事実です。

自宅でパパッと着替えよう、そうしよう。そんで賑やかましい村の様子とは一線を画して自分の世界にこもろう。うん、私の正義は二次元の中。いいよな、ご都合主義。イコール、ヒナコ不在！

何気にオタクをカミングアウトしてしまいました。すみません、腐女子です。現実に耐えられなくて厚みのほとんどない彼らがマイダーリンです。

ノマカプとかやおいとか百合百合とか普通に口から出ます。いいよな、二次元…。

収穫祭に家に閉じこもるバカがどこにいる、ここにいる、ヒャッハー！てなわけで誰も見やしねぇ一張羅を脱ぎ捨てる。代わりに着替えるのはゆるゆるになった襟元かつ洗いすぎてめっきり生地が薄くなった古着だが、どんな辛い乙女ゲーも脱出できないＲＰＧも乗り越えた戦友でもある。不満などあろうか。

「さてっ、ヒナコのいない世界に逝くか！」

この日にこそ相応しいと取り置いていた物語がある。自分を投影できる女の子が、平々凡々な日常から飛び出して、いきなり異世界にトリップしちゃうアレである。何でも鉄板と言われるほど萌える展開まみれらしい。

リアルじゃない友達から聞いた話だと、あなたは勇者だ！と選ばれた者として王族や神様にチヤホヤされる展開だとか。何それ、うらやましすぎる。私なんて生まれてこの方厚遇された記憶がない。死ねヒナコ。

要約すれば召還された世界で、王子やら王様やら宰相やら神官やら冒険者やら魔法使いと恋愛したり憎まれたりそれはそれは色々多種多様な人間関係に恵まれるとか。な、何それ、私これまでスルーされてばかりで自分の名前呼ばれることすら碌になかったよ！さすが物語、ヒロインに優しい。

そうか…私でも友達を作れたり恋人を作れたりするのか。

涙がこみ上げてきた。他にも色々こみ上げてくるものがある。どんだけヒナコの陰に隠れた人生だったかが染みた。ちょー染みた。

「えーっと、食料に飲料水に書くもの？」

非リアル友達様のメッセを読み上げながら、部屋にこもる下準備を

する。
読み終わるのはとてもとても時間がかかるから、準備をしとかねばならんという話。問題ない、明日は収穫祭二日目である。むしろ二日も三日も現実逃避できるなら、ありがたすぎる。

「意外と荷物が多くて旅行用のリュックサックになってしまった…いやしかし、トリップするため！どんと来い非現実！ようこそヒナコ不在世界！」

テンションＭＡＸで私は分厚い冊子を開け、そして私は本当に異世界の扉を開けたのだった。

ーー本当に開けるなんて聞ーいーてーねーぇえええぇえ！！！！！

この世界はフィクションです。（前書き）

到着。けれど肉椅子に。

この世界はフィクションです。

完全に不意打ちであった。
一から丁寧に教えてくれる非リアル友人様に尻尾を振りすぎてしまったらしい。
異世界に飛び立っているのか、束の間の暗闇の中で、めまぐるしくヒナゲシは考えていた。
信じすぎてバカを見たのは一度ではない。けど外なら、村以外の人ならあるいはと考えていた。

ーーバカ過ぎる、ヒナゲシ。この世は私の為にあるのではないと知っていた筈なのに。

違う世界に向かいながら、強く強く自分を戒め直し、そうしてヒナゲシは扉を潜った。

ひゅぽんっ。
と何だかとても気の抜ける音がして、体に衝撃が走る。言うならば不安定だった態勢がようやく安定した、みたいな。

そうっと片目を開け、異世界とやらを観察する。
目の前にオッサンがいた。

「あれ？」

てっきり厳かなる神殿とやらで、大勢の前で召喚されているものと思っていた私は、目の前でワイングラス片手にポカンとしてるオッサンに、ポカン返しをした。

胸元をくつろげたシャツに、ワイングラス。何だかとってもリラックスタイムだ。

「えっ？」

ガン見されているので居心地が悪く、身じろぎしたらビクリと椅子が揺れた。

ーー待て待て待て。

椅子って揺れる？しかもビクッと生きてるみたいに。

そろそろと首を動かし、背後を見上げーーっぎゃあああああ！

人間椅子。

私はどうやら人さまのお膝の上に乗っかっていたらしい。

それも綺麗な綺麗な銀髪のオニーサンに。

「……」

「……」

「……」

お願い、誰か何か言って。

その足から降りろとか降りろとか降りろとか。

驚愕に目を見開く私とオッサンと銀髪美形。

時が止まった。

かといって良い歳をしているお兄さんに、いつまでも乗っかっていて良いものだろうか？いや、良い筈がない。

そうっと尻をズラす。
そうっと、そうっと。
そうして体が落ちると思われた瞬間、ホールドされた。

「っ危ない！」
「わああっ」

どうやら私が自覚なしにその身が落ちると思われたらしい。長い腕が、ボディに絡まる。

更に、沈黙。
オッサンはやっぱりワイングラスを持っていて、私は囚われていて、人間椅子は私を戒めたままで。
何これ、どんな展開？私勇者設定じゃないの？？

混乱も極み。
私は泣いた。

その涙、プライスレス（前書き）

泣きなさい、笑いなさい。

その涙、プライスレス

だばだーっと涙を流す私に、ポカンとこちらを見ていたオッサンが慌てたように誰かの名を叫ぶ。

「り、リーゼシアっ！」

上擦った声にすぐさま部屋の扉が開いた。意匠の凝ったそれは両開きになっていて、一人の女性が足早に近づいてくる。
目が素早く金髪のオッサン、今は肉椅子となっている銀髪美形、そして壊れた蛇口化したヒナゲシを確認する。私を見た瞬間、驚いたように目が瞠られたが、それも歪んだ視界の向こうでのことだ。詳細は知らない。

「な、何だ？どこか痛いのか？腹が減ったか？これはーー酒だからダメか、ええと、水？ミルク？リーゼシア、子供は何を飲む？」
「すまない、座り心地が悪いのだろうか？俺も椅子になった経験は浅くてーー待て、出来るだけ椅子になりきる、だから泣き止んでくれ」

ボトボトと涙を垂れ流す私に、立派な大人二人が狼狽している。それを見て取り、ヒナゲシは泣きながら呆気に取られている。
だって、泣いているのはヒナコでなく、私なのだ。
二人が泣いていれば大人たちはヒナコを取り囲み、気がつけば輪の中から弾き飛ばされていた。
悲しいが事実であり、ヒナゲシの歴史そのまんまである。

もはや何で泣いてるのかもわからなくなった頃、ヒナゲシはかつてないほどの高待遇を受けていた。

オッサンが呼びつけたリーゼシアという女性に優しく宥められ、涙を拭われる。オッサンが机に並べられた飲み物の説明をしながら、どれが飲みたい？どれでも選べと選択肢を委ねてくれる。銀髪美形はヒナゲシを己の膝から転がり落とすこともなく、尻が安定するよう横抱きに乗せてくれた。いや別に肉椅子じゃなければどうしても嫌！ってわけじゃないんですけど。私そこまで図々しくはないんですけど。

何これ、何なの？これが勇者特典ってやつ？？
小さな村で生きてきて、ここまで自分に関心を示されたことはない。あまつさえ、自分の涙の理由と精神状態を心配されるなんて。
異世界トリップ凄過ぎる！！

流れていた涙は途中から感涙になった。心中では「ありがとうございます、ありがとうございます！」と選挙演説者のように感謝を叫んでる。口からも出したが、何が何だかわからなくなったようで、大人たちはただ優しく頭や肩や背中を撫でてくれていた。

目が、優しい。手のひらが、温かい。
何より、その意識はヒナゲシに向けられていた。

う、あ、うぉ、うぉおおおぉん！！！！

昨夜は妙齢の女性と寝ました。（前書き）

人と目が合う。嬉しい。

昨夜は妙齢の女性と寝ました。

十三にして泣き喚くとか超恥ずかしい。
けれど生まれて初めて『ヒナゲシ』を見てくれたのが嬉しくて、それどころか私の涙で感情を揺らせてくれるなんて天使としか思えなくて、理性がハジけ飛んだ。

おいおいと泣いた私は気がつけば銀髪美形にお姫様抱っこされてベッドインさせられていた。もちろん銀髪美形のではなく、リーゼシアさんという女性のものだったのだが。
グスグス涙の止まらないヒナゲシを優しく抱きしめ、一緒に眠りについてくれた。

泣きすぎて前後不覚に陥るように意識を落とし、目覚めるとお湯で絞った布で顔を丁寧に拭ってくれる。
羞恥心で死にたくなっているヒナゲシに無体を強いることも一切なく、優しく手を引かれて食卓に連れて行かれた。何故か昨日会ったオッサンと肉椅子が居たが。

そして、ハイ、今ここね。
今現在、何故か銀髪美形のお膝に乗って朝ごはんを食べております…よ…。

いたたまれない、と顔面に貼りつけて懸命に逃れようとしているのだが、昨日目の前で幼子のように泣き叫んだことが念頭にあるのか、まるであやすように朝食を食べさせようとするのだ。オッサンと一緒になって。

「まずはスープで喉を潤してからパンを食べるか？それとも先に飲

み物を口にするか。何がいい？昨日はミルクを好んで飲んでいたな。果実を絞ったものも幾つか用意させたぞ」

テーブルに並ぶ食器は多い。一斤どころじゃないパンが複数種と、スープの入った皿の下にまた皿が敷いてあるし、サラダにつけるらしきドレッシングも複数あるようだ。
卵の下にある肉はベーコンやハムより厚みがあって、何かわからない。そこは異世界らしさだろうか。

物珍しさからじっと食卓を眺めてしまったが、お腹が空いているとでも思われたか。
オッサンが自分の好みか子供向けか不明のジャムを伸ばしてパンを寄越した。銀髪美形に。

ーーおい…。

勇者特典なのか、また泣かれてはたまらないと思われてるのか、実際年齢より低く見積もられているのか、ヒナゲシに羞恥プレイを要求する。
一晩一緒に過ごしてしまったリーゼシアさんはニコニコと見守っている。助けは期待できない。

基本、ヒナコが傍らにいたことで、注目を浴びない生活を送り続けていたヒナゲシには刺激が強い。
どうして自分は男性のお膝で食事をしているのか。いちいち食べるものをリザーブされているのか。口元が汚れるとすかさず拭われるのか。さっぱわからん。
私は幼児ではないのだから。

困惑顔で銀髪美形を見上げると、前髪を撫でられた。違う！

ねぇリーゼシアさん、と救いを求める目で見つめると、おかわりですねとミルクを注がれた。違う！
ちょっとオッサン、と金髪に呼びかけると「何で自分だけ」といじけられた。ついうっかり！

口が締まれば喉をくすぐるように撫でてくる。ペットか！

大事に大事にされることに慣れなくて、子供みたいにお世話されるのが恥ずかしくて、ヒナコではなくヒナゲシを見てくれるのが嬉しくて、やっぱり涙目になるのであった。まる。

勇者のアイデンティティー（前書き）

何か仕事下さい。

勇者のアイデンティティー

涙ぐんでいる状態がデフォルト化しそうなので、慌ててヒナコを思い浮かべた。
整った顔の作りに、理想的な等身。疚しさの欠片もない笑顔に、周りに集まる村人。その輪に入れない、入ってはいけないヒナゲシーー一気にナーバスになった。ごめん、生きててマジごめん。オゥフ。

浮ついた気持ちがあっけなく沈静化され、表情も元落ち着いたものに変わる。それはヒナゲシにとって馴染んだ自分自身に相違ない本性だったが、その顔を見た三人ーーこの異世界で出会ったとても親切な人たちは珍妙な顔をした。泣いたカラスがもう笑った、というところだろうか。すみません、お騒がせしました。いつもはこんな迷惑な子じゃないんで許して下さい。

さぁ心機一転！昨日今日の弱虫ヘタレヒナゲシはなかったことにして、この世界の人たちに報いるべく、働きますよっ！

キリッと表情を引き締め、Ｌｖ１でも勇者らしく見えるように装う。ここの住人の困りごとは何であろうか？やっぱり魔族に襲われてるとかそういうの？うむ、体力に自信は皆無だが、馬車馬のごとく働く気は満々である。任せろ！

頼り甲斐のある微笑みをイメージし、ヒナゲシは言う。
「魔族討伐に行きます！」
ここでの地位確保のために。

端的に言うと、断られた。というか怒られた。意思の疎通を端折りすぎたかもしれない。
そういえば召喚はされたが、この世界の説明やレベルアップ法を聞いていない。ぬかった。
あれ、そもそも喚び出されたのは神殿とかじゃなくて人様のリラックスルームだっけ？うん？向こうで本を開いて異世界に喚ばれるわけだから、向こう側が扉を開いてることになるのだろうか？あれ、召喚は？

「？？？」

こちらが魔法陣とか何かそういうファンタジックな儀式を行い、あちら側にいた選ばれし勇者がどどーん！と不可思議な力に導かれ、世界を渡るのだと思っていたのだがーーそれだとどこに本を開く必要性が出てくるのだろう。あれ？

私、勇者だよね？？

非萌えのツンデレ（前書き）

シリアスが羞恥に負けた。

非萌えのツンデレ

私より魅力のある『ヒナ』を知らず、私こそを『ヒナ』だと思い、ヒナゲシを『ヒナ』と呼んでくれる人がいる。
こんなこと初めてで、昏い歓びが胸にある傷から溢れ出す。
少なくともあの本を開いたりしない限り、ここにヒナコが来ることはない。同じ地続きには居らず、世界を超えて離れているのだから。
運命の鎖で繋がれていた片割れがようやく離れてくれたような心地だった。

重しになっていた、足枷が外れたのだ！もう二度と傍らで柔らかに微笑むことはない！私の前に立つ人が、私でない『ヒナ』に奪われることはないんだ！！

そう思う私は性格が悪いのだろう。顔も確実にヒナコより下だ。
けど、これがヒナゲシ。偽らざるもう一人のヒナである。

その劣る私しか知らない人がいる。
口元を緩ませ、慈しんでくれている。
傷つけぬよう、気遣いながらゆっくりと頭を撫でてくれる。
自らの膝を差し出し、食事の世話までしてくれているのだ。

ずっとずっと欲しかったもの以上の麻薬を打ち込まれた気分だ。
中毒性があり、一度きりでは満足できない。
この優しい微笑みが消えたら泣いてしまうだろう。そっぽを向かれたらみっともなく許しを請うだろう。床に額をつけるくらいの土下座を今してもいい。

村にいた頃は自覚したことなどなかったけれど、ヒナゲシはずっと

飢えていたのかもしれない。魅力の差で冷遇されるなら仕方ないと諦めた振りをして、惨めったらしくもエサが欲しい欲しいと。ツンデレかよ。私ツンデレだったのかよっ！？

村での素振りを思い出し、血行が異様に良くなり汗が出た。
突如赤面するヒナゲシを心配する異世界人に、今度は冷や汗が出た。

ー私、性格や顔が悪いだけでなく、更にツンデレだったようです。

業は深い。

勇者誕生（前書き）

ヤらせて下さい。

勇者誕生

脳裏では村人相手にさんざんツンデレる自分がくるくる回っていた。

ーーべっ、別にあなたなんか好きじゃないんだからっ！

ーーなななによっ。本当はあたしのこと見てるんでしょ！？でしょ！？

ーーねぇ、ヒナコより愛してよ……。

ぐぁあぁぁあぁあッ！！

言ってない！そんなこと言ってないからぁアッ！！

はぁはぁ…ツンデレという響きが衝撃すぎて、やった覚えのないことまで妄想してしまった。うん、落ち着こう私。そんな劇薬指定されるようなシナは作ってないから。セーフだから！

むしろ銀髪美形を肉椅子専用に連れ歩いてる方が問題……って何してんじゃ私ィエェェェァァァァァァ！！！！！

気づいたら、ソファに座っていた。

ソファって腰掛け椅子だよね。腰を落ち着けるための椅子だよね。ね？

なのに何で私は…しつこく、銀髪美形に座っているのでしょうか…。

え？ちょっと待って？

革張りの立派なソファに、銀髪美形が座ってて。更にその上に私が座っているという構図でございますよ。

椅子に座ってる人に座るっておかしくね？せめて隣で良くね？？

しかも横座り。私これ村で見たことある。
アッツアツの夫婦だったけど……。

そしてリーゼシアさん。
昨日いきなり世話係を押し付けられたというのに、それを鬱陶しがるでもなく、今も何とか髪にリボンを結ぼうとしている。ちょっ！可愛い！可愛いんですけどそのリボン！私の顔面には恐れ多いですから！やめて！

一番始めに見つめ合ったオッサンは、思うさま人に餌付けをした後どこかへ行ってしまった。炭水化物（＝パン）ばかり押し付けてくるので「ウザい！」と吠えてしまったが気を悪くしてないだろうか。

そうだ、Ｌｖ１状態も何とかしなくてはならない。
魔族云々については実在しそうだったので、やはりそこんとこで喚ばれたのではないかと推測。
魔族がいるので、魔王を倒すとかも有るかもしれない。剣など持ったことはないが、出刃包丁と菜切り包丁は少し自信がある。三徳包丁は言わずもがな。刺身包丁は借りて使ったくらいだが、魔物を綺麗にスライスする必要はないだろう。

さっき全力で止められたのは見ればわかるほどのＬｖ１っぷりだからと思う。必要とされるためなら多分包丁で何とかできる。ヒナコの鎖が離れた両手がやけに軽いから。
今私はウズウズしてるんだ。
初めて、誰かのために尽くせる。私の好意を受け取ってくれそうな人たちがいる。

ー勇者として、ここの人たちの悩みを討ち払ってみせる。

登場人物（前書き）

これまでの人物像の紹介。外見は別の機会に。

登場人物

主な登場人物

☆ヒナゲシ：主人公
日本の小村で育つ。十三才。
周囲の愛情を根こそぎ奪われてきたためヒナコに強いコンプレックスを持ち、常に自信がない。
異界に渡り初めて色眼鏡なしに自分を見てもらえたため、異世界は何が何でも守らなければいけないマイワールドであり、どんな関係にある住民でもヒナコの影響を受けない彼らは貴重だと考える。
明確に守りたいものが出来たため、それ以外には冷淡。元世界も興味範囲外に転げ落ちた。

☆ヒナコ
同じ小村で育った従姉妹。
ギャルゲーや乙女ゲーの主人公の如く、何もしてなくても愛される日本での“選ばれしヒロイン”。
生まれた時から自発的に行動しなくても愛される地位にいたためKY、且つヒナゲシのような鬱屈した思考は理解できない。

異世界住民

☆金髪のオッサン
ヒナゲシの界渡りの際、始めに見た人物。
オッサンオッサン言われてるが、まだ四十前後と思われる。

私室に急に現れたヒナゲシだが、衝撃を上回るほど可愛い。

☆銀髪美形
肉椅子。
ヒナゲシが界渡りをした折、何故か彼の膝上だった。
それが彼の中の何かを開発してしまったらしく、以降ヒナゲシの座るお膝は自分以外認めない。

☆リーゼシア
ヒナゲシと一夜を過ごした妙齢の女性。
オッサンと知り合いらしい。
母親以上に自分を気遣ってくれる年上の女性に、ヒナゲシはメロンメロンになっている。

契約しました。（前書き）

ご利用は計画的に。

契約しました。

数々の攻防を乗り越え、赤地に黒と金刺繍の入ったリボン一つで髪を結ばれた頃、オッサンが戻ってきた。

昨日のリラックスムード全開の着衣でない分、精悍さが増している。長めの金髪も丁寧に結わえられ、詰襟の白軍服のような服装だ。白は汚れが目立つと思うので、血塗れになるだろう軍服には向かないと思うのだが…金刺繍もされ一兵卒には見えないから、机仕事が主な役職かもしれない。

異世界に詳しくないヒナゲシが観察していると、ふと彼女の頭部の変化に気付いたオッサンが目を見開く。

「これは…リーゼシアか！」

「さようでございますわ」

チョイ、とスカートを摘んで礼をとる。

その上品な仕草にリーゼシアさんも只者ではないのかもなと思ってると、オッサンが親指を立てていた。……グッジョブ？

いまいち流れがわからなかったが、ソファ前の机にズラリと書類を並べられ、真意を確かめるどころではない。

「？」

「オゥフ、その上目遣いやめなさい。話が進まない、進められないからねお父さん」

父？何の話だ。

「これ、読めるかな？」

示されたのは何枚もの用紙。

英語に使われるようなアルファベットに近いが、よくわからない。

何故なら、ヒナゲシがアイ・アム・ア・ペン！と言っちゃう底辺だからである。
そう、三十代後半、妻子有りの親父もヒナコの周りをうろちょろしていた。壇上に上がられる度、死にそうになる胃の腑。何度机の角で殺したいと思ったかしれない。

「読めません」
「よし！サインしてね！」
「……」
脳裏に保険金詐欺とか死の気配とか生活困窮とかヤクザ来訪とかコンクリ詰めとか浮かんだが、ヒナゲシは迷うことなく羽根ペンを取った。

普通ならこういうの、犯罪に巻き込まれるかもと思うんだろう。私も正直そう思った。
けど、そういう自己防衛を投げ飛ばしても良いほど、ヒナゲシはこの世界に感謝している。

今もこうして私の目を見つめてくれている（あっ、名前知らねぇ！）突き飛ばして蹴りを入れることもなく、膝の上に乗せたままでいてくれる（あれっ？そう言えばこの人も誰！？）
リーゼシアさんは一晩中私を抱きしめて眠ってくれた（ぬくぬくでお胸ぽわぽわ、五秒で天国でした！）

「これは何と読むのかな？」
「雛罌粟。ヒナゲシです」
「まるで紋章のようですわね」

親にも兄弟にも埋められなかった空洞に、あったかいものを流し込んでくれた。

こんなに充足感を感じたことはない。
この中の誰かに裏切られたとしても、きっと感謝を忘れない。忘れることなんて、出来ない。

ーー命なんか、あげる。私はもう、ヒナコの背中に隠れて生きられない。

だから、だから。

「よし、書けたね。これで各種契約書類は完了っと」

捨てないで。目をそらさないで。
嫌っても憎んでもいいから、私だけを見て。
その為なら何でもするから。何でもしてみせるから。

ーー何て、重い。

自嘲せずにはいられない。
いつか捨てられそうな気もするが、今は勇者という道がある。そこで必要とされるまで頑張るしかない。

「ほいっと」
「えぇぇぇぇ!?」

バサリと紙が宙を舞う。人の覚悟を投げられた。おい！

パッ！と紙の束が発光し、消える。
「えぇぇぇぇぇ！」

「さて、面倒な作業は終わったし、お茶にしようか」

「いま」
「お茶請けもあるんだよ。焼き菓子は好きかな？」
「ひか」
「子供は甘いもの好きなんだっけ？今いろいろと取り寄せてるから、期待していいよ」
「消えっ」
「そう言えばお荷物どうなさいます？中に生物が入っていたら出した方が良いかもしれませんわ」
「お」
「中身に興味があるから、ぜひ見せて欲しいなぁ。鞄の素材も変わってたよね」
「まぁ、いつまで経っても子供のように好奇心旺盛なんですから」
「ふふっ、ヒナゲシが来てから更に元気いっぱいですね。私より若く見えますよ」
「ヒナゲシにパワーをもらったのかな？仕事も全然辛くないんだよね」
まぁ、オースティン様ったら。
いやいや、リーゼシアもヒナゲシにべったりで。
そんなことを言うクリスは膝上から離さないな？
うふふ、あはは。

ーー聞けよ！！

とある傍観者の談（前書き）

ヒナゲシが異世界に来た時、現地住民は。

とある傍観者の談

俄かに城中が騒がしくなったのは、昨夜遅くのことだった。
常ならば恐れ多くも皇帝陛下は執務室を下がり、私室にて酒精を愉しまれる。その際同室されるのは、宰相や大臣様方、後継者であらせられるクリストファー様がお話し相手。
会議室や謁見室ではお話できないこと、この先国を導くにあたり、どのように舵を取られるのかを話し合われている。私のような者には理解すらできないことだ。
そんな認識をしていた夜分遅くに、リーゼシア様が私たちに指示を出しに来られた。
水やらミルクやら、アルコール分が全くない飲み物を用意せよとのお達しだった。
ワインを嗜まれる陛下が飲むとは到底思えないものばかり。意味不明だったが、やれと言われればやる他ないのが私たちだ。
「ああ、それと柔らかな布を出して。顔を拭うものよ。これは、今すぐに」
この場に現れるのも珍しい上に、声を掛けられたことも無かったので、現場はやや混乱の様相を呈していた。
ーー何故、こんな場所にリーゼシア様が！？
ーー何故、こんな夜遅くにそんな命令を？？
迷惑と感じるほど未だ接触はなかったのだが、城で働く者すべてが彼女がどういう立場か、どういう立場だったか知っている。
その後どう暮らしていたかも。
ーー彼女は、こんな風に喋る方だったろうか？
ーー彼女は、私たちに声を掛けるような方だったろうか？
違和感と、ただ淡々と続いていた毎日の変化に、誰もが困惑していた。

必要なものを自ら運ぼうとするリーゼシア様にまた戸惑い、陛下の私室へと消えた後も誰もがそわそわと起きていた。
また何か、所望されることがあるかもしれない。
そんな大義名分に、ほとんどの者たちが起きたままでいた。明日の仕事に響くかもしれないのに。
そして案の定、変化は訪れる。
陛下ご自身が認める方しか入れない私室から、黒髪の少女が突如出現したのだ。
ーー！！？？？
黒、という色彩自体も珍しく、本来人が持つ色ではないとされる。
そんな髪色をした少女が、入った形跡もなく、陛下の私室から出て来たのだ。衛兵が顎を落とさんばかりに驚いている。
本来ならば不審人物の侵入を許したとして、首を撥ねられても仕方ないミスだが、怒られることはなかった。どころか、御三方はとても機嫌が良かった。
ーークリストファー様ご自身で、少女を抱いて運ばれている。
その、衝撃。その後ろに続く御二方の、穏やかなお顔。
ああ、変わったのだーーと。見かけた者すべてが思ったに違いない。
黒髪の少女と共に、世界が終わっても変わることがないと思われた、不変の事実が変わったのだ。と。

翌朝、いくら睡眠不足であっても、私たちの仕事に休みはない。
昨晩の出来事も気にかかり、恐らく誰もがリーゼシア様を気にしている（黒髪の少女が運ばれたのは、リーゼシア様の私室であった）
今か今かと扉が開くのを待ち、開いたら開いたで指示を請うように群がった。
「朝食の支度をお願いします。陛下とクリス様も御一緒されると思いますので、そのように。それから、今朝はミルクや果汁を搾ったものも。パンも子供が美味しく食べられるものがいいわ」
それから幾つか事細かに指示を出すと、アッサリ室内に戻られた。

何というか…昨日の昼までのリーゼシア様と同一人物とは思えぬような変わり様だった。
給仕の際には間近で見られるだろうと踏んでいたら自らすると部屋から給仕を閉め出すし、各部屋で事務的に朝食を取られる陛下やクリス様が朝も早くからリーゼシア様の私室に現れた。通常ならゴシップ的な話題が横行するところである。
それがないのは、やはり昨夜の出来事があったから。
あの黒髪の少女が、彼らの中心にいることはもう疑いようのない事実であった。

冷厳としていた城内に、一陣の風が吹き抜ける。
まずは、陛下やリーゼシア様たちのお顔を上げさせた。あの、頑ななほど表情を変えなかったお顔を。
それはこの国にとって良かったのか？それはまだわからないけれど。

「オッサン、まじウゼェエエエェ！！！」
「ははははは、可愛いなーあ、もうっ」

ーー良いのだ、と思いたい。

クリスマス小話（前書き）

『ヒナゲシの華』、クリスマス小話。

クリスマス小話

世間的に、クリスマスである。

りんりんりん、しゃんしゃんしゃん。

小さな商店街にもその時は来ていて。

何故かヒナゲシも、今ここにいる。

「え、待って？私地球出奔したよね？異世界絶賛謳歌中だよね？これ夢とか言う？むしろ今までが？うわ泣いちゃう、ヒナゲシ超泣いちゃうー」

小説で泣いたので今はご遠慮下さい。

「え、何この脳内アナウンス？私逝った？逝っちゃった？？」

クリスマスの鬼籍です。あっ、間違った、奇跡です。

「うーわー、ないわ。マジこんな展開望んでない。この後来るだろう厄災に座布団三十枚！」

座る人が落ちますね。

さて、今日はイヴで明日はクリスマスです。

世間ではきっとリア充していて素人小説読んでる人は少数派でしょうが、ヒナゲシのように「クリスマス？何それ美味しいの？」とばかりにパソコンや携帯やスマホに噛り付いてる人のためにクリスマスの奇跡を起こしてみました！人為的にね！

「あっ、きっとこの脳内アナウンスは故障してるんですよ！普段はこんなに毒吐いたりしませんよ！たぶん接触不良起こした機械の不調です！！」

はてさて、ヒナゲシの回想にさんざっぱら出ているヒナコさん。物語の序盤で彼女の手を振りきって、ヒナゲシが異世界逃亡したために、さっぱり出演の機会を失してしまいました。

「まるで私が悪いみたいだね！私も全くもって想像してなかったよ！つーか何だこのアナウンス！？私にフォローさせたりすんな！」

ヒナコちゃんに直接会ったことなんてないもの、悪口なんて言えないわ。むしろヒナゲシさんの心の狭さが問題なのじゃないかしら？なんて思われてるでしょう皆様のために、わたくし召喚魔法を取得致しました！ヒナゲシをちょっくら地元召喚し、更に今時分クリスマスパーティ盛り上がり最高潮！！のヒナコさんを召喚です！

「ぎゃあああ！？やめっ、やめろぉおおお！！！！！」

じんぐるべーる♪　じんぐるべーる♪　すっずっがぁーあなるぅー♪　ヘイッ！

ぽむ。

「あっ？あれ？あれ？ええ？ヒナちゃ～ん！？」

ヒナコ召喚☆完了ッ！

「ぐぁあああっ！ムカつく！超ムカつく！！」

「ヒナちゃん、まだ普段着なの？もうクリスマスパーティ始まってるよ！」
「そして案の定オマエ私が居なくなったこと気づいて無い！何だ！？その調子じゃ家族の誰一人として気づいてないの！？悲しすぎるだろこれ！こんなんクリスマスの日に知りたくなかったよ！！」
一話のクールっぷりが見る影ありませんね…あ、違ったツンデレか。プ。
「嗤った！嗤ったなお前！？クリスマスに苦い思い出しかない私の気持ちがわかんのかテメェエエエ！！！」
「ひ、ヒナちゃんヒナちゃん、何でそんなに興奮してるの？っていうか怒ってる？怒ってるの？？え…ヒナ、ヒナちゃんのこと、怒らせちゃった？」
「そして相変わらず鈍い！勝手に凹むわ沈むわ、あんたこれ第三者から見られたら責められんの私なんだからね！？おいアナウンス！結界張れ！私このままじゃ殺される！」
え、何言ってるんですかあなた？そんな結界とかアニメや漫画みたいなこと出来るわけないじゃないですか…。
「っテメェエエエ！！！今さっきやった魔法はスルーか！サンタさんのプレゼントか！象印のステンレスか！」
やけに怒りっぽいですね。
魔法瓶とかどうでもいいんで、とりあえず『ヒナゲシの華』、宣伝して下さいよ。
「あ、何だそのためにヒナ呼ばれたの？ヒナちゃんヒナちゃん、ヒナちゃんの可愛いとこめいっぱい皆に教えちゃおうよっ！」

「私より可愛いお前に言われてもな…」
「ヒナちゃんもすーっごく！可愛いよ♪」
「『も』って言ったな？」
「えとえと、皆さんメリークリスマースっ！」
「聞き流した！お前やっぱりその言動わざとだろ？」
「ヒナは、ヒナちゃんの従姉妹で大親友の、ヒナコって言います！小説の方にはあまり出てないんですけど…ヒナちゃんばっかなんですけど…ヒナコのことも覚えてて欲しいな！（ニコッ☆）」
「（ああ…読者の皆さんもヒナコに取られるのかな。ここ日本だしな。私可愛くないしな）」

あらー、ヒナゲシさんのＨＰがどんどん削られていってますね。ヒナコさんが隣に並んだ瞬間から、ゴリゴリ削られていってます。あ、赤ゲージ。
ちなみに頭上に何かマークが…髑髏マークみたいなんですけど、何でしょうか？

「（聖夜に死ぬとかシャレになんない。それもヒナコの側で。私ちゃんと埋葬されんの？魂はあの世界に戻りたい。魔物に殺されてもいいから、あっちの世界で死にたかったよ…）」

しゃんしゃんしゃん。りんりんりん。

「…ん」
「おや、目が覚めたのかな？」
「クリス様、ヒナゲシの肩から毛布がずり落ちてますわ」

「今日はとても寒いから、風邪を引いてしまうかもしれないよ。ブランデーを少し入れてみるかい？」
「まぁ、オースティン様ったら」
頭の片隅でと鈴のような何かが鳴り響いてる気がする。
まだ夢心地の気分で目を開けると、クリスの膝上で暖かな布に包まれ、抱きしめられていた。

「……リーゼシアさん？」
「はい、ここに居りますわ」
寝過ぎたのだろうか、瞼が泣いたように腫れぼったい。
その部分に細く冷たい指が触れる。
ああ、と安堵するような吐息が漏れた。

「こわいゆめ、みたかも」
きゅうと縋るように手のひらに甘える。
まぁ、とリーゼシアの優しい手のひらが、ヒナゲシを甘やかすように撫でた。

ーーあの村は、もう要らない。
実の親だって、血の繋がった兄弟だって、要らない。十年以上いたという元居た歴史だって捨てて良い。
私が今必要とするのは、私に触れてくれる手のひらだけ。
どれだけ薄情と言われようが構わない。
懐かしさなんて、今この心地良さに比べたら、屁でもない。
ここで紙のように儚く散っても構わないとすら思う。
「リーゼシアさん」

「はい」
「私、クリスマスって…嫌いだな」

クリスマス？と訝る声が三つほど聴こえたけれど、それに応える気にはならなかった。
どうせこの世界には、クリスマスなど無いのだからーー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5189z/

ヒナゲシの華

2011年12月24日23時54分発行